

お薬手帳についての聞き取り調査

松岡淳子、近江 薫、保坂るり子、宮形 滋、木暮輝明、原田 忠
中通総合病院 血液浄化療法部、同 泌尿器科

Hearing Survey of Medicine Pocketbook

Junko Matsuoka, Kaoru Omi, Ruriko Hosaka,
Shigeru Miyagata, Teruaki Kigure, Tadashi Harada
Nakadori General Hospital

<緒言>

透析患者は複数の診療科や医療機関にかかり、多種類の内服薬を服用している場合が多く、患者自身が薬の内容を理解し正しく服用されることが重要である。又患者個々の生活リズムや職業などにより、確実な内服が困難な場合が多い事から、医療者は患者の薬の情報を共有し、それぞれのライフスタイルに合わせた内服指導が必要である。

そこで、お薬手帳の普及が進む現在、当院透析患者の内服管理について検討するよい機会と考え、第一段階として、お薬手帳の利用状況について調査を行った。

<研究方法>

対象：当院外来維持透析患者 82 名

方法：アンケート用紙を用いての聞き取り調査

有効回答：82 名 (100%)

倫理的配慮：研究の意図を説明し、データは研究以外に使用しないこと、研究に参加しなくても不利益にならないことを説明し、同意を得た。

<患者背景>

・年齢は、火・木・土の患者の平均年齢が 71 歳と最も高く、次いで 2 部の患者となっている (図 1)。

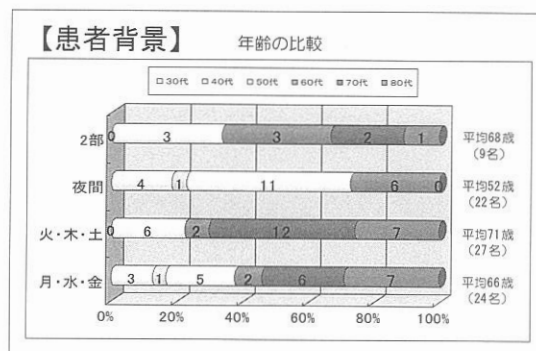


図 1

- ・内服薬の数が最も少ないのは、夜間の患者となっており、約半数近くが7種類未満である（図2）。
- ・仕事をしている患者は、圧倒的に夜間の患者が多い（図3）。

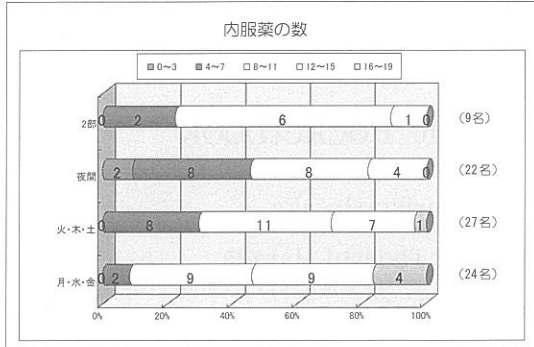


図2

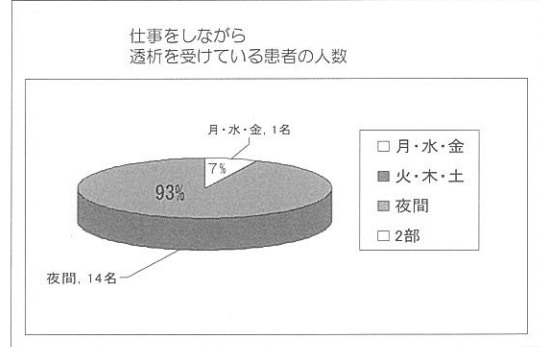


図3

<結果>

- ・お薬手帳の普及率は、全国的には薬の使用頻度が高くなる高齢者でさえ5割弱にとどまっている中、当院外来維持透析患者においては、65%の患者がお薬手帳を持っていた（図4）。
- ・シフト別に比較してみると、火・木・土と2部の患者が78%とお薬手帳を持っている割合が最も高く、逆に夜間の患者のお薬手帳を持っている割合は、41%と最も低い結果であった（図5）。
- ・お薬手帳を持っていると答えた患者のうち9割の患者が、1冊のお薬手帳を使用していることがわかった（図6）。

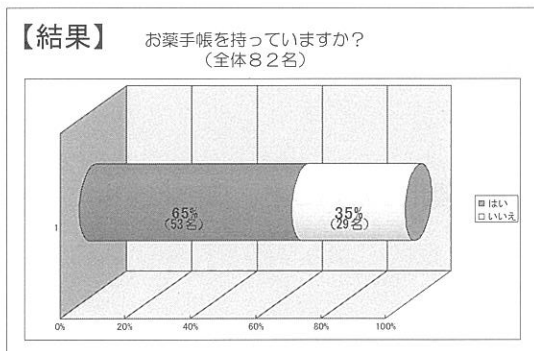


図4

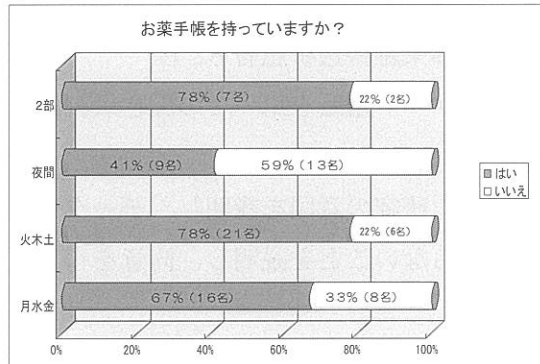


図5



図6

・ 70%の患者が、他科・他院でも同じ1冊のお薬手帳を使っていることがわかった。又いいえと答えた13名の患者の中には、他科・他院の受診をしていない患者が6名含まれていた。以上のことから、83%の患者がお薬手帳を本来の目的通りに使用していることがわかった（図7）。

・ 66%の患者が、毎月定期薬をお薬手帳に記録していた。

お薬手帳を持っているにもかかわらず、毎回同じ処方内容であることが多い為変更時のみの記入や、「めんどくさいから」などの理由で、毎月お薬手帳に記録していない患者が23%、時々しか記録していない患者が9%いることがわかった（図8）。

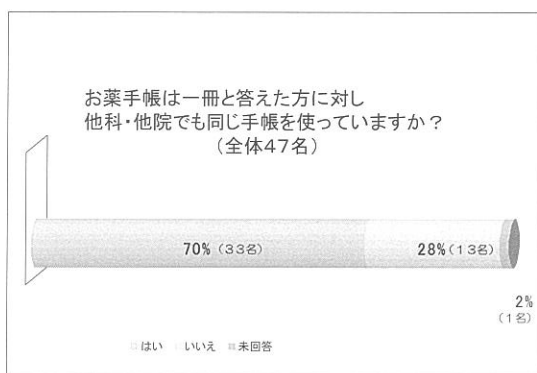


図7

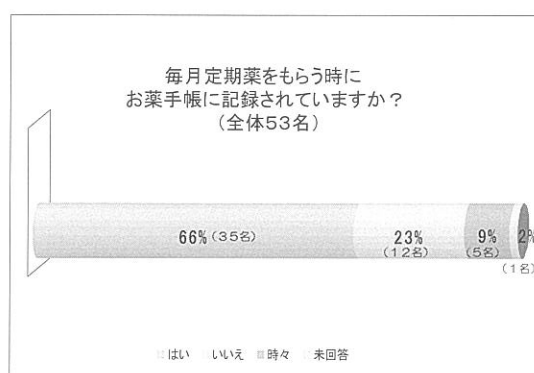


図8

<考察>

・ 平均年齢の高いシフトの患者の8割がお薬手帳を持っているという結果から、高齢者程複数の診療科や医療機関にかかっている場合が多く、内服薬の数も多い為、お薬手帳を活用する割合が高いと考えられる。

・ お薬手帳を持っている割合が最も低かった夜間の患者は、6割以上が仕事をしており相対的に自立度が高い事と、内服薬の数が少ないことから、自己管理する上でお薬手帳の必要性が低いと予想される。

・ お薬手帳を持っているにもかかわらず、毎回同じ処方内容であることが多い為変更時のみの記入や、「めんどくさいから」などの理由で、3割以上の患者が記録していない、又は時々しか記録していないという結果から、「医療情報を開示し、医療者と情報共有できる」というお薬手帳本来の目的を理解し、有効活用できるような働きかけが必要と考える。

・ 今後お薬手帳の更なる普及に努めると共に、患者個々のライフスタイルに合わせた内服管理の指導に役立てていきたいと考える。

<まとめ>

医療費削減政策が進む中で、薬の無駄を省く仕組み作りや患者の適切な自己管理能力が今後更に求められていく。

私達は、身近なお薬手帳の活用を通して、患者の内服管理の指導に努めていきたい。

参 考 文 献

- 1) 日本大学薬学部 薬事管理学研究室 “高齢者の服薬状況と薬識に関する調査研究、2003.